

# 原始の普遍信仰について

[www.jomaca.join-us.jp/genshi.pdf](http://www.jomaca.join-us.jp/genshi.pdf)

JOMON(縄文)あか데미校長 山田 学まなぶ

※日本民族の原点も、研究するため、旧かなづかひを、させていただきます。

夜空にて

諸国家に分断された、今の地球にて、ほぼ忘れられてしまつてゐた、(原始の普遍信仰)が、あつたやうです。それを主張し出したのは、日本人。1998年から、わたくしが親しく、おつきあひさせていただいた、齋藤守弘先生(著者名の際は「齋藤守弘」も・1932~2017)です。地球全体に比較すれば、戦争の少かつた、日本列島。神道および皇統の連続性が、信奉されてきた、日本民族であるからこそ、日本社会から、この、考古学と民族学の盲点に、氣づきやすかつたのでせう。各種遺跡の保存。神社仏閣の保存。『日本書紀』『古事記』など、文献の保存。明治以降、欧米科学の吸収。これらの好条件から、齋藤守弘先生が、氣づきました。

齋藤守弘先生は、東京教育大学(現・筑波大学)にて、物理学を、修められました。が、学生時代より、UFOや異星人、各種超常現象に、関心強く、その内容にて、往年のマスメディアを、牽引する存在と、なつた。ただし、当初より、「古文献にみる、UFOや異星人らしき記述」など、太古史へのまなざしは、強かつた。一定の収入を得られ、地球各地の太古遺跡などを、自由に見てまはるうちはたと氣づいた。それらほとんどに、わが縄文遺跡との、共通性があるではないか、と。

そこで、物理学にて基礎づけた、宇宙観と、また、マスメディア人気にてつちかつた、必ずしも学界にとらはれぬ、民衆感性からも、太古地球人の心性について、独自の推理を、始められた。ご関心の方向が、超常現象から、太古人の信仰に、変化したわけである。その方向の(出版界からは、イメーヂ・チェンジの)著作が、1997年講談社文庫の『神々の発見超歴史学ノート』です。これ以降、神奈川歴史研究会その他、あちらこちらが主催する研究会にて、その都度、たとへ口頭説明を聴かぬとも、独立して理解できるレジュメを、ていねいに蓄積された。わたくしは、齋藤先生の「追っかけ」となり、研究会後に、先生とわたくしのふたりのみで、話し込むことも、多くありました。が、この齋藤守弘イメーヂ・チェンジの出版続行は、実現せず、永眠された。ご家族の無念も、お聞きしたことがあります。

この度、羽仁 礼氏による、優れた編集にて、『きやくこうしん極孔神仮説で神話や遺跡の謎が解ける超常現象研究家・斎藤守弘が晩年に取り組んだ古代史研究の集大成！』(ヒカルランド2022年5月) [www.honyacub.com/shop/g/20606288](http://www.honyacub.com/shop/g/20606288) が、発刊された。

原始地球人Ⅱ旧石器時代と新石器時代(日本では縄文時代)において、地球(とくに北半球)に、普遍存在した、信仰があつたやうである。地球にて、部族闘争や、民族闘争が、開始される以前のことです。信仰場面の中心は、夜空です。北極星のすぐまはりは、明るい星が少い。美しい星々が時間につれ大回転する、夜空にて、北極の孔のやうに、見える。

人間は、祖先による世界認識が、子孫による世界認識に、伝承される。この事実が、肉体の生死とは、独立に、尊重された。ので、すでに原始地球人において、「魂の永遠の輪廻」といふ信仰が、生成した。母の胎内から、新生児が出現する、孔が、原始地球人において、先の、北極の孔と、二重写しとなつた。あの北極の孔の向うに、大地の人間の肉体の生死とは、独立に、「魂の生死」に係する、宇宙の胎内が、あるのではないかと。

これについて、齋藤守弘先生は、信仰対象となつた、北極の孔を、〈極孔神〉と命名された。もちろん、女神である。

対する男神は？ 信仰場面の中心は、夜空です。明るく輝き、その満ち欠けが、女性の生理とつながる、月。満月↓新月↓三日月にて、とくに、原始地球人が、生命再生の象徴とも、感性した、〈三日月〉です。そのかたちは、男性の陽物にも似る。

第三の信仰は、大地を水平にはふ、へびです。直立二足歩行にて、思索までする、人間は、背骨が疲れやすい。へびのあり方に、自身の背骨修正のあり方も、学んだのかもしれませんが。

大地にて人間の肉体の死後、それとは独立に、死者の魂の輪廻は、どうなるか。大地から、死者の魂を、〈極孔神〉の向う(「魂の生死」に係する、宇宙の胎内)まで、運ぶ。その役をする、〈翼あるへび〉を、原始地球人は、想定した。地球(とくに北半球)に、普遍存在した、信仰であるが、後世、中華大陸にては、龍りゅう信仰にも、変性した。

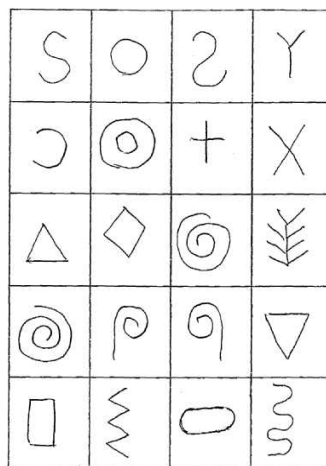
#### 土偶

以上の仮説は、後述するやう、考古学・民族学・民俗学・文献学などの成果に、基礎づけられてゐます。が、学界の専門家たちは、精緻な史資料群にも、とらはれ、原始地球人の心性に同化してゆく、民衆感性。夜空を大局観する、物理学教養。それらが、不足したかもしれません。

一方、文学の究極課題は、〈愛と死〉である。さう、聴いたことがあります、〈極孔神〉〈三日月〉〈翼あるへび〉といふ、〈原始の普遍信仰〉は、〈愛と死〉課

題に、直結してゐます。

齋藤先生は、縄文の土器や土偶にある、文様に着目した。原始地球人が、貴重そのものの、土器や土偶に、おそらく、いのちがけにて、刻み込んだ、それら文様は、ただの装飾なのだろうか？ 原始地球人なりの、生理感性や、物理感性の、本質表現、ではないのか？ 同じ文様が、地球各地の遺跡にも、実在する。原始地球人に、普遍的な、意味表現、ではないのか。各民族の表意文字・表音文字発生以前、忘れられた、普遍表意の、亜文字、ではないのか。この原始表現と、後述するが、その意味解説は、今日なほ、わが縄文遺跡と、わが日本神話などにおいてこそ、特別に、保存状態が良い。それを記念し、齋藤先生は、この原始表現を、〈縄文記号〉と、命名された。狭い集団のみにて通用する、記号ではなく、むしろ、後世の諸民族をも超えた、普遍表現ではあるが、諸表現が発達した、今日から観れば、原始地球人に特殊な、記号にも、見える。



齋藤守弘先生直筆  
〈縄文記号〉

『極孔神仮説で…』を読まると、よくわかるが、〈縄文記号〉と、〈原始の普遍信仰〉を、追究する、齋藤先生の文体は、地球各地の遺跡などへ、自由闊達に、飛ぶ。老いてなほ、好奇心旺盛そのものの、わたくしが接した、齋藤先生のころ、そのままです。ただし、諸学からの検証に耐へるため、諸証拠の記述は、正確です。

なかでも、ハヶ岳山麓（長野県茅野市）出土の、国宝縄文土偶〈縄文ビーナス〉です。その美しい土偶の頭部に、〈縄文記号〉が、びっしりある。諸証拠から、長年かけて、つちかはれた、〈原始の普遍信仰〉仮説を、これに注目すると、まとめて説明できる、最重要証拠でした。先生はいつも、〈縄文ビーナス〉について、そのレプリカを手に、嬉々として、語つてをられた。〈縄文ビーナス〉こそ、〈極孔神〉の具象化であり、この土偶を立てた、まはりに、各地からの巫女候補が参集する、縄文神学Ⅱ〈原始の普遍信仰〉を学ぶ、当時の最高学府が、あつたのではないか。それを齋藤先生は、『神々の発見』316頁に、「縄文アカデミー」と、表現された。わたくしどもが運営するサイトは、齋藤先生にお断りし、表記を少し変へ、〈JOMON(縄文)あかでみ〉と、命名させていただいた。〈縄文記号〉

が表す、生理感性、物理感性が、わが父・山田俊郎としをが発明した、〈TQ技術〉の本質を、理解してゐる。さう、納得したからです。

齋藤守弘仮説に、注目する。〈原始の普遍信仰〉を、再認識する。原始地球人の、〈場ば〉(空間の性質)や、陰性陽性への、敏感性を、復興する。一万年以上の、平和な縄文時代を、再認識する。今後、諸民族の調和へ、仲介のあり方も、創造する。まづ、日本民族の野性の復興として、〈縄文るねっさんす〉を、推進する。このあたりを、齋藤先生にお断りし、〈JOMONあか데미〉として、始めました。

#### 古墳と社寺

原始地球人からは、後世日本の、古墳時代。日本列島一律に、普及した、前方後円墳。まさに、円と四辺形といふ、巨大形状そのものが、当時の土木生産力も反映した、〈縄文記号〉ではないのか。水田稲作を、輸入した、弥生時代の次に、縄文神学Ⅱ〈原始の普遍信仰〉を、復興させ、日本皇国を、創始しようとした、宗教行為、ではなかつたのか。これが、齋藤先生の、推理です。

さらに後世の、社寺のあり方が、齋藤推理の、始りでした。とくに、拜殿の方向設定。由緒ある社寺ほど、参拝者が、真北より10度ほど東に(ときには、西に)ずれた方向に、拜礼する設定。さしあたり、〈聖方位〉と命名した。また、〈聖方位〉の社寺の、石段などに、〈盃状穴〉を見かけることが、多い。〈盃状穴〉は、石の表面に、人工的に刻まれた、真円の小さなくぼみ。のち、さまざまな証拠と、総合し、〈極孔神〉方向に、拜礼する設定。〈極孔神〉を象徴する、石への刻印。さう、氣づいた。また、神社の屋根にある、千木ちぎのかたちは、〈縄文記号〉そのもの。堅魚木かつをぎ(屋根に水平に並べた棒)の数は、〈縄文神聖数〉に、したがふ。齋藤先生は、〈縄文記号〉に関連し、〈縄文神聖数〉も、提唱された。

ともかく、日本民族にとり、現代なほ、あたりまへな、社寺のあり方が、〈原始の普遍信仰〉を、継承してゐた！

#### 『日本書紀』と明治政府

果して、わが『日本書紀』は、〈原始の普遍信仰〉を、継承してゐないか？ さういふ、強い関心から、齋藤先生は、ていねいに、読み込まれました。たとへ、架空の話のやうでも、その背景に、縄文時代や弥生時代の、後世に伝へたい、切実なことも、あつたのでないか。また、その表現が、なぜ、架空の話のやうにも、なつたか。(記紀神話を、ただの空想とし、研究を、実質封印した立場には、たてない。)

『古事記』のほうが、文学性あり、人気もあるが、史書としては、『日本書紀』のほうが、厳正なやうです。『日本書紀』の編集立場に、不満な勢力が、文学性も高め、ある種の訴へをしたのが、『古事記』ではないか。(『万葉集』も、さう。)

しかし、とくに、漢字の選定は、『日本書紀』が、格段に、厳正なやうです。奈良時代の日本にて、漢字の起源についての知識は、優秀だったやうです。現代にて、漢字の起源を、明らかにした、著名な白川 静先生の『字統』を、齋藤先生は、駆使した。漢字選定の、厳正さに、肉迫しました。

結論。いはゆる、造化の三神が、ずばり、〈原始の普遍信仰〉ではないのか。『日本書紀』「神代上」第一段・一書四の、あめのみなかぬしのみこと天御中主尊が、〈極孔神〉。高皇産靈尊たかみむすひのみことが、〈三日月〉。神皇産靈尊かむみむすひのみことが、〈翼あるへび〉。この、漢字選定が、三者の内容をよく、表意してゐないか。

後世、農業時代に入り、生産にとつての重要性から、お天道さまてんたう、といふ日本語も、成立した。しかし、大地に立つ人にとり、太陽は、東から西へ、動く。なので、道といふ字も、入る。夜空の〈極孔神〉のやう、不動存在ではないのです。すなはち、太陽は、天御中主尊に、ふさはしいのではない。天御中主尊は、妙見信仰などに、継承されたほかは、ほぼ忘れられた、夜空の不動存在なのです。

太陽信仰なら、それが昇る、東の方向か、もしくは、南方に向ひ、拝礼するところが、自然。齋藤先生が、『極孔神仮説で…』187頁にて、重大指摘を、してゐます。天照大神あまてらすおほみかみを祀る、伊勢神宮からして、〈極孔神〉方向に、拝礼するやう、設置されてゐる！

さて、天照大神は、照すの字も、あるので、てつきり、太陽神と、想ひ込まれてきました。地球各地にある、太陽神は、その陽性の性格から、ほとんどが、男性神。「女性神の、太陽神」は、そもそも、自然なのか。現代の漢字理解と、漢字の起源は、異なる。齋藤先生が、『字統』も手がかりに、周到に、再検討した結果、天照大神は、意外にも、夜間に、〈極孔神〉に祈り、霊降しをする、巫女であった。神道にとり、むろん、重要存在だが、実は、天皇家の祖先でもなかった。

「天皇家の祖先たる、女性の太陽神」は、明治以降、列強に対し、精神自立する、国家神道の、にはか創作のため、周到な、伝統理解が、不足してゐた。

『極孔神仮説で…』192～193頁より、齋藤発言を、直接、聴いてみませう。

江戸幕藩体制を脱し、亡国の危機の中で近代的統一国家日本を確立するため、この記紀神話に基づく天皇制の徹底の実施を行ったのはやむを得なかっただろう。とはいえ、天皇家もまた犠牲を強いられた。

天皇家存続のためという理由で、明治新政府の決定により、本当の祖先ではなく別の祖先を崇拝することを強いられたのだ。歴史的に正しい天皇家の祖先は縄文章創期にさかのぼり、女性極孔神と対偶の関係にある男性高皇産靈尊なのである。

歴代天皇家において、天皇の守護神として、宮中八神殿で高皇産靈尊を連綿と祭祀してきた。注目すべきは、この宮中祭祀八神に天照大神は含まれていな

いことだ。

天照大神称揚の背景に、卑弥呼実在の、記憶もあるのではないか。わたくしは、さうとも、想ひますが、将来への、研究課題です。

国家神道といふ言論を、よそに、宮中儀式の口伝としては、今日の大嘗祭まで、〈原始の普遍信仰〉の、継承であつた！これが、齋藤守弘仮説です。

天皇家の三種の神器も、さう、です。〈極孔神〉 〓 鏡。〈三日月〉 〓 勾玉<sup>まがたま</sup>。〈翼あるへび〉 〓 剣<sup>つるぎ</sup>。

#### 〈超近代〉へ

原始の母系制社会から、しだいに、父系性社会に、移行し、転化した。その過程にて、信仰ないし神話も、変性した。ある種の、空想表現化も、増したらう。各民族の神話の、その背景を、探るにあたり、〈原始の普遍信仰〉との、連関を、探るにあたり、注意すべき要点です。

ユダヤ教・キリスト教の、旧約聖書冒頭にて、へびが、悪者扱ひされてゐる。残念ながら、ユダヤ教が、〈翼あるへび〉など、〈原始の普遍信仰〉に対する、否定の上に成立したといふ、証拠ではないのか。

ユダヤ教・キリスト教も、背景とした、16世紀からの、人間社会近代化。その恩恵に感謝しつつ、わが日本民族こそが、齋藤守弘仮説も、起点に、〈超近代〉へ、ご恩返しをすべし。

それは、素朴な、女性男性対等思想の、復興でもあらう。日本流の、かはゆい民衆芸術に、本格想念も、注入できるでせうか。

わたくしどもの、将来への理念は、〈地球協同社会へ〉です。

この際、地球にて、部族闘争や、民族闘争が、開始される以前、〈原始の普遍信仰〉が、あつたのではないか、といふ仮説、わが日本民族こそ、その仮説を、検証しやすいのではないか、といふ指摘。この、齋藤守弘歴史観、もしくは超歴史観を、この二十数年のわたくしと同様、追ひかけてみることは、有益ではないでせうか。

大日本帝国の敗戦から、77年めの本日。もしくは、〈終戦 〓 あらゆる国家間の戦争の終り〉を、祈りたい日に。

令和4年8月15日